



Title	「客家」として生きる女性たちの日常的実践：越境と婚姻を通じたアイデンティティの確認と再構築
Author(s)	范, 智盈
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101617
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 范 智 盈 ）	
論文題名	「客家」として生きる女性たちの日常的実践： 越境と婚姻を通じたアイデンティティの確認と再構築
論文内容の要旨	
<p>本論文は、台湾から日本へ移住した「客家」と呼ばれる女性たちが、移動や婚姻を契機に父系的な親族構造の下で男性たちによって表象される「客家」としてのアイデンティティとどのように向き合い、折り合いをつけ、時には対抗してきたかを明らかにすることを目的とする。具体的に、血縁関係や姻戚関係、家庭内で担う役割に埋め込まれた日常的な実践に焦点を当てることで、女性たちの客家アイデンティティの動態的かつ多層的な側面を解明するとともに、従来の客家研究で見過ごされてきた女性の経験や実践を再評価し、新たな視点を提示する。</p> <p>序章では、まず「客家」や「客家アイデンティティ」の形成が、これまで主に男性中心的な視点を基軸に議論されてきたことを指摘した。この中で描かれる「客家女性」の表象は、女性自身の経験や実践を十分に反映しているとは言いがたい。本論文は、台湾から日本へ移住した「客家」と呼ばれる女性たちの日常的実践に着目し、移動や婚姻という社会的・文化的変化の中で、特に血縁関係や姻戚関係を通じた客家の「名付け」や「名乗り」のプロセスに注目し、女性が外部から与えられる「客家女性」という役割期待や性別規範に対して、異なる社会的・文化的環境においてどのような日常的実践を展開しているのかを記述する。本研究を通じて、従来の男性中心的な議論を超え、女性の日常的実践を基点に、「客家」や「客家アイデンティティ」の動的な側面を明らかにすることを目指す。</p> <p>第1章では、客家研究の歴史的展開と漢族親族研究における女性の役割と位置付けを検討した。従来の客家研究が漢族の枠組みに位置付けられる中で、女性の役割や経験が相対的に周縁化されてきた傾向があることを指摘した。この課題意識に基づき、本研究は、婚姻や移住を通じて女性の日常的実践に焦点を当て、男性中心に表象された「客家」に対して、女性がどのように交渉し、再解釈しているのかを明らかにすることを目的としている。理論的枠組みとして、Pierre Bourdieuの「ハビトゥス」という観点から、女性が移住や婚姻を通じて異なる社会的環境において、「客家女性」としての役割や行動様式を仮構されるものを前提とし、この「仮構としてのハビトゥス」は、男性中心の客家アイデンティティに対する女性の柔軟な対応や交渉、さらにアイデンティティの確認と再構築の可能性を示唆するものである。本研究はこの理論的枠組みを基盤に、具体的な日常的実践の記述し、女性が男性中心に表象された客家アイデンティティとどのように向き合い、折り合いをつけ、新たなアイデンティティを模索しているかを検証することを課題として設定した。</p> <p>第2章では、本研究で採用した方法論について詳細に論じている。本研究は、人類学的フィールドワークを基盤とし、参与観察と半構造化インタビューを主要な調査手法として採用するとともに、フィールドノートの分析に重視した。調査は、「日本客家関西崇正会」、「客家美食桐花享苑」、および「関西地方在日台湾太太」という三つの組織を通じて実施され、これらの組織は、調査対象者の選定およびアクセスにおいて重要な役割を果たした。本章では、まず調査の実施期間、調査地、および具体的な調査手法について順を追って説明した。次に、フィールドワークを通じて得られた具体的な事例を提示し、それらを基に調査対象者のプロフィールや背景を論じた。これにより、調査データの収集プロセスを明確化するとともに、その分析に必要な文脈を示すことで、本研究の信頼性を支える方法論的基盤を構築した。</p> <p>第3章では、婚姻を契機に日本へ移住した「客家花嫁」の事例を取り上げ、婚家ででの日常的実践に焦点を当て、「客家女性」としての行動と、その背後にある理由を考察した。分析の結果として、「ハビトゥス」は人々の行動や思考を形成する持続的な構造を指し、個人の行動を方向つける一方で、外的な社会的条件や環境の変化、個人の主体性によって、意図的に異なる選択や意識的な反応が生じることが明らかになった。この過程を通じて、「客家女性」と</p>	

しての日常的実践は、男性優位の抑圧にとどまらず、女性は主体的に行動し、家族関係を「構築」、「維持」、「強化」に積極的に関与していることを明らかにした。

第4章では、婚姻内の女性が「客家女性」に対する役割期待にどのように交渉し、また抵抗するかを考察した。異なる婚姻形態の事例を通じて、女性が婚姻内の日常的実践を通じて期待される役割に対してどのように応答し、その役割を交渉しつつ、時には拒否や抵抗を行う過程に焦点を当てた。この分析により、女性が婚姻関係において直面する他者からの期待と、個人の行動様式や価値観とされている「ハビトゥス」は相互に影響を及ぼしあうことが明らかにした。女性たちの日常的実践が単なる役割期待の受容にとどまらず、主体的な対応を通じて役割が動的に変容し、新たに再構築するプロセスを明らかにした。特に、移住や越境婚姻といった新たな社会的文脈において、婚姻は女性によって従属の場ではなく、日常的実践を通して、既存の性別役割を意識・再定義する交渉の場としても機能している。

第5章では、婚姻後に女性が生家へ戻る「里帰り」が、家族関係を再編成する重要なプロセスであることを論じた。里帰りは、家族関係の維持や女性の役割移行において重要な意義を持つ行為であり、婚姻によって形成された新たな家族関係が、生家における従来の家族観との接触や再確認を通じて、自身の行動様式や価値観を再評価する機会を提供することが明らかになった。具体的には、里帰りを通じて、婚姻後に希薄化した「ムスメ」や「キョウダイ」としての役割を再び顕在化し、それにより婚姻後に変化した家族内での位置づけが再編成されるプロセスが観察された。このプロセスは、女性が婚姻や移住を通じて複数の文化的要素を再認識し、それらを統合する機会を提供すると同時に、自身の行動様式や価値観を見直す契機ともなる。このように、里帰りは女性にとって単なる訪問でなく、婚姻後の生活における役割や家族関係を動的的に再構築する重要なプロセスであると結論づけられる。

第6章では、女性の移住に伴う飲食に関する文化的実践に着目し、それがどのように過去の経験や記憶を再帰的に「客家」として再構築し、日本における社会的つながりの形成や文化的再生産にどのように関与するのかを考察した。特に、「客家料理」の創出プロセスを検討した結果、異国における「客家料理」は単なる食文化の再現にとどまらず、料理を作り、共有するという実践を通じて、共通の出身地や文化的背景、ジェンダー的役割に基づく仮構的な「客家料理」が形成されることが明らかになった。これは、個々の移住女性が持つ味の記憶や調理経験を再現しながら、現地の食文化を取り入れ新たな文化的枠組みとして再構築するプロセスを含んでいる。このような食実践は、単なる文化の伝承ではなく、移住先での社会的ネットワークの構築と文化的アイデンティティの動的な表象の場としても重要であることが明らかとなった。さらに、食を通じた実践は、家族やコミュニティ内での感情的な結びつきを強化する役割も果たしており、集団としての客家表象を形作る重要な場となっている。このように、文化の形成と継承には変動性が伴うものの、日常的な実践に基づく具体的な行動が「客家」の維持と再生産を支える上で不可欠であると結論付けられた。

終章の結論として、本研究は、女性が婚姻を契機に血縁や姻戚関係の中で、名付けや名乗りを通じて表象される「客家アイデンティティ」と折り合いをつけ、交渉していることを明らかにした。女性は既存の客家アイデンティティを単に受容するのではなく、日常的実践を通じて主体的に向き合い、時には妥協し、時には抵抗する能動的な行為を展開していることが確認された。これにより、男性中心に表象されてきた客家アイデンティティに対して、女性がどのように応答し、交渉を通じてその枠組みを再解釈してきたのかが示された。このようなプロセスを通じて、「客家」は単なる伝統的な枠組みにとどまらず、主体的な経験や行動、交渉によって変化し続ける動的な存在であることが明らかになった。まとめると、従来の研究では、男性中心に表象されてきた客家アイデンティティが中心であったが、本研究では、女性の主体的な経験や日常的実践が、客家文化やアイデンティティの生成、継承の基盤であることを示し、この視点を通じて、「客家」や「客家アイデンティティ」を動的かつ多面的に再評価する枠組みを提示した。

今後の課題として、客家研究におけるアイデンティティやエスニシティの動的な視点の重要性を意識しながら、客家文化やその表象におけるジェンダーを超えた包括的な客家アイデンティティの形成可能性をさらに探究することが挙げられる。また、客家が持つ「客・主」の特性を踏まえ、グローバル化が進展する現代社会において、他者との関係性における実践や行動をより深く分析し、再検討する必要がある。この過程において、女性の視点からの探求が新たな知見を提供し、その重要性を強調することが求められる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (範 智 盈)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	河森 正人
	副 査	教授	三好 恵真子
	副 査	教授	宮原 暁 (人文学研究科)
	副 査	講師	島 蘭 洋介 (グローバルイニシアティブ機構)

論文審査の結果の要旨

范智盈氏の博士論文は、台湾から日本に移住した「客家」と呼ばれる女性たちが移動や婚姻を契機に、父系的な親族構造の下で男性たちによって表象される「客家」としてのエスニックなアイデンティティとどのように向き合い、折り合いをつけ、時に対抗してきたかを、民族誌的調査を通して明らかにすることによって、女性の実践という次元で「客家」のエスニック・アイデンティティを再考しようとした意欲的な論文である。

本研究の対象である「客家」は、戦乱などから逃れるために、黄河流域の中原から中国南部に移り住んだ人たちの末裔とされ、今日、中国国内の広東省梅県や福建省永定、南靖、台湾、東南アジアをはじめ、世界各地に広がって居住する客家語を話す方言集団であると捉えられることが多い。本研究は、そうした人類学における対象の同定、及び本質主義と構築主義の論争に関して、漢族親族研究の泰斗、渡邊欣雄の「仮構」の概念を用いつつ、新たな次元から理論的な刷新を図っている。「仮構」とは、イメージや計画、政策、モデルなどが実体に先立って存在し、それに基づく運動や実体化が進むことで、文化が形成されるプロセスを指している。渡邊は「客家文化」についても「仮構」の視点を適用し、先行するイメージや政策に従って形成・伝承されていく過程で「客家人」や「新客家人」が次第に構築されていくと考えている。

これに対して范氏は博士論文の第1章で、渡邊らの「仮構」が、長い伝統を有する漢族親族研究に依拠しており、既存の「客家」のエスニシティの議論が結局のところ父系系譜的な構成を前提としていると批判し、「仮構としてのハビトゥス」という視点を提示している。そして、「ハビトゥス」が幼少期の社会化と経験の共有を前提とした無意識的な身体技法や振る舞いを生み出す構造であるとすれば、「ハビトゥス」の概念を、台湾の異なる地域から日本に移住した女性たちにそのまま適用するわけにはいかない。そこで范氏は、ある種の経験を再帰的にモニタリングすることで生ずる「仮構としてのハビトゥス」に着目するのである。

本研究において、范氏が記述する女性たちの日常的な経験のなかに生ずる「仮構としてのハビトゥス」は、これまで多くの研究が明らかにしてきた面とはかなり異なった「客家」のエスニシティの側面に光をあてる。第2章で本研究での民族誌的フィールドワークの概要と、主要な調査協力者のプロフィールについて紹介したのち、第3章では、婚姻を契機に日本へ移住した「客家心白」(婚家に嫁いだ女性を意味する)の事例に基づき、女性たちが日常的な家事や祭事を取り仕切ることで、どのように婚家における自分と周囲との人間関係を調整しているかを記述している。そこでの記述から、「心白」が「仮構としてのハビトゥス」として「生家でのやり方」を婚家に持ち込み、家父長的な価値観や規範に従うというよりも、主体的かつ選択的にそれを再構成していることが明らかになる。「心白」は「薪白」とも書き、台所を取り仕切る含意を持つ。第3章には、台湾の生家から日本の婚家に嫁ぐ女性が台湾から丸いまな板と菜切り庖丁を携えて来日したことを思い出す記述が出てくる。丸いまな板と菜切り庖丁は、客家の女性が嫁ぐときに持っていくべきものという「仮構」が語られるが、それが調理用具である点は、婚家に嫁ぐ女性と同じく台所に置かれるものである「薪白」という呼称で呼ばれることと奇妙に符合し、興味深い。なお第3章では、幼少期に婚家に養子として迎えられ、のちに婚家に嫁ぐ「細心白」の事例が紹介されている。台湾や中国で一般に「童養媳」として知られる婚姻形態について、台湾から日本への移動を伴う婚姻において具体的な事例を提供している点でも、本研究は貴重である。

第4章は、女性たちが台湾での家族関係から離脱する手段としての日本への移住に焦点が当てられる。そこで女性たちは台湾での伝統的な家父長制や性別役割を仮構し、そこからの脱却が移住や婚姻関係の解消、移住先での再婚の動機として語られる点が指摘される。離婚した女性は、生家や周囲との関係に苦悩するが、そもそも女性が婚姻関係を解消する背景には、夫婦関係や婚家との関係に対する不満がある。そうした状況下で、女性は日本への移動に活路を見出し、過去の人間関

係の破綻の元凶を、「仮構としてのハビトゥス」としての「家父長制」や「性別役割」に帰して回顧することで、日本への移動や現在の婚姻生活の正しさと必然性を説明しようとするのである。第4章で、范氏を取り上げる調査協力者は、いずれも「客家についてはあまりわからない」と語っているが、このことは、「仮構としてのハビトゥス」として彼女たちが想起している「家父長制」や「性別役割」と、彼女たちの心理的な距離を示している。

第5章では、婚姻後に女性が「生家(妹家)」へ戻る「里帰り」に焦点を当て、「里帰り」が、家族に関する「仮構」としての価値観を生み出す、あるいは確認する重要な契機となり、そうした価値観に即して、生家での女性の位置づけや、生家と婚家の関係が再構成されるプロセスであることが論じられている。婚家に嫁いだ女性は生家に里帰りすることで、生家における女性の位置づけを再帰的にモニタリングし、家族関係の規範や価値観が「仮構」として認識されるようになるのである。そうした家族関係の規範や価値観は、婚家での女性の位置づけが再帰的に参照されない点に特徴がある。台湾から日本に移住した女性は、台湾の夫の実家(婚家)で過ごす時間を最小限にする傾向が指摘されている。婚家での祖先祭祀への参与といった既存の研究で強調されていた事柄が、日本に移住した女性の場合にはほとんど見られず、生家での祖先祭祀への積極的な関与に置き換わっている点は、「里帰り」が、規範や価値観の単なる再確認にとどまらず、複数の文化的要素を再認識し、それらを主体的に統合する機会であることを示している。

第6章では、食をめぐる過去の経験や記憶が再帰的に「仮構」としての「客家料理」を生み出すプロセスが、客家料理教室のフィールドワークを通して記述されている。本研究の対象となる女性たちは、台湾での出身地がまちまちであるということもあって、「客家の食文化」を共有していない。そもそも「客家の食文化」がどのようなものなのかも、共有されていない。そうしたなかで、「客家料理教室で料理」の仕方を体得したり、客家料理店で「客家料理」を食べたりすることで、女性たちの間に感情的な結びつきが醸成され、「客家」の文化的なアイデンティティが生み出されるのだと、范氏は論ずる。

日本を始めとする西側諸国の漢族親族研究は、1980年代後半までは、中国大陆でのフィールドワークを実施することができず、もっぱら台湾や香港、東南アジアの華僑華人社会を代替的なフィールドとして行われていた。台湾でのフィールドワークは、当時は意識されていなかったものの、本研究の対象となる「客家」の居住地域をフィールドとするものが多かった。その後、台湾・三峡でのフィールドワークに基づくマージェリー・ウルフのモノグラフが女性の日常的な実践に焦点を当てたが、その成果が十分に咀嚼されないまま(つまり従来の親族研究の成果と前提が温存されたまま)、台湾での親族研究の調査地は、客家研究に上書きされていった。范氏の研究は、そうした客家研究を親族研究の次元から掘り起こし、「客家」のエスニック・アイデンティティを社会構成主義的に再考した研究として、エスニシティ論への理論的な貢献という面でも、またフィールドワークに基づくエスノグラフィックな研究という面でも、高く評価できる。

これまでの客家研究は、父系的な系譜を前提として「客家」を方言集団などとして定義し、エスノグラフィックな調査の対象として同定してきた。范氏の研究は、「客家」のエスニシティが再帰的に定義されること、そうした定義のプロセスに、女性たちが主体的に関わってきたことをエスノグラフィックに記述している。同時に、このことは、范氏がエスノグラフィックな調査の対象を同定する際に、きわめて大きな困難に直面し、それを克服してきたことをも意味している。「客家」に関する既存の漠然とした定義を採用しない場合、調査の初期的な段階で、誰を「客家」の女性として研究対象に含めてよいか判別がつかないからである。この困難を克服するため、范氏は、関西にある各種の団体にアプローチするだけでなく、自らも家庭を持つ生活者として大阪に暮らすことで、エスノグラフィックな調査の協力者を探しあてていった。本研究は、日常的実践や経験のレベルで客家のエスニシティをとらえなおすことで一貫しているが、この点も、8年の長期にわたる参与と観察を通して自然に選択された研究の視点であることが窺える。

以上が本研究の具体的内容と評価であるが、その学術的意義について総論的に述べるならば、本研究は、范氏の客家語や台湾華語を用いた綿密なフィールドワークを通して、「客家」のエスニシティが女性の日常的実践に基づいて社会的に構成される過程を示しており、ここに客家研究および漢族親族研究、さらにはエスニシティ論への貢献を認めることができると言える。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。